

内村鑑三とユダヤ人

再臨運動とユダヤ人問題

黒川知文

Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

第三章 再臨運動の経緯

1917年(大正7年)から翌年にかけて「イエスがこの世に再び現れる」という内容の再臨を唱道する運動が、東京を中心に関西の主要都市にも広がった。その唱道者の中で中心的役割を果たしたのは、内村鑑三であった。

この大正時代の再臨運動はどのようにして発生し、なぜ二年間で衰退したのであろうか。

再臨運動に関する研究は、再臨論を思想的観点から分析するものが主であり、宗教運動として社会学的観点から分析したものはゾンターク・ミラの論文以外ほとんどない¹。

本章では、運動の進展状況を分析し歴史学的観点から再臨運動の性格と背景を考察する。史料としては同時期に発行された信仰雑誌や日記等を主に使用する。

ところで、一般的に、再臨運動は1918年(大正7年)1月に開始されたとなっているが²、東洋宣教会では、すでに一年前よりこの運動が推進されていた。したがって、この時期をもふくめて、再臨運動の時期を設定しなければならない。

再臨運動はその進展状況から、以下の5時期に区分される。すなわち、1 準備期、2 開始・高揚期、3 対抗・充実期、4 対抗・沈静期、5 衰退・転換期である。順に見ていくことにする。

1 準備期(1917年5月 12月)

中田重治(1870 1939年)は、1897年に米国ムーディ聖書学院に入学し「聖潔」の体験をして翌年帰国した。メソジスト教会を脱退後1901年にC.E.カウマン夫妻に協力して福音伝道館と聖書学院を開設した。1908年に東洋宣教会を創設し、1917年には東洋宣教会日本ホーリネス教会の初代監督に就任した³。『聖潔之友』は福音伝道館の機関紙であり、月2回の刊行であったが、1913年からは週刊となり、中田が主筆として社説を担当した。東洋宣教会の地方伝道は順調に進展し、1916年には全国に及ぶことが目標とされた。

『聖潔之友』に再臨に関する記事が最初に掲載されたのは、1917年5月3日である。巻頭の社説において、中田は「主の再臨を早むるには聖潔の運動が益々盛んになり、潔めらるゝ信者が続々起るなれば其だけ基督

の再臨が早くなる譯である」⁴と述べている。

聖潔の運動が進展する結果として再臨がある これを伝道の目標とした。

A 再臨の年月日の予測

さらに中田は再臨の時を予測した。

再臨に関する記事は、553号、558号、569号、570号にも連載され再臨の年は1917年とされ、イエスの再臨する日が以下のように預言された。

「新年のラッパの鳴る日は来17日である。もし此日に主が再臨し給ふなれば其喇叭はユダヤ人が鳴すのでなく、天の使等が鳴すのである。もし我等の計算が間違ふて、今年でなく、来年であるとすれば、9月7日である。」⁵

再臨予想日については、ユダヤ人の新年祭(ラッパ祭)のユダヤ暦を太陽暦に換算して計算している⁶。

しかし再臨は9月17日には起らなかった。10月11日には以下のように説明されている。

「主は今年来るものとすれば先月17日の喇叭祭に来るかも知れぬと我等は警告を発したることである。しかるに主は来り給はなかつたから、全然ない事になったといふのではない。御約束は厳として存して居る。近き中に来り給ふに相違ない。時の早晚に関らず主を待望む態度を有て居る事は大切である。」⁷

10月31日には、東洋宣教会ホーリネス教会宣言書が公示された。標榜する四重の福音の中に、「十字架の救い」、「聖霊の全き潔め」、「神癒」とともに「主イエス千年期前再臨」が入っていることに注意したい。

B ハルマゲドンの戦い

11月29日には、旧約聖書ダニエル書11章の「南の王」をローマ帝国の再興と解釈して英国と連合諸国だとし、「北の王」をギリシア帝国の再興とみなしてドイツとロシアとアジア諸国だとし、ハルマゲドンの戦いが起きることと、エルサレムがイスラム教徒から取り返されることが述べられている⁸。

12月13日に英国がエルサレムを占領してオスマントルコ帝国から奪還した。この日発行された『聖潔之友』には「殊に今月中かの聖地に於る出来事に細心の注意を払ふべきである。また主は聖徒を空中に携へ挙ぐるために来り給ふ事は近々の中である」⁹と述べられた。

C 再臨待望信者

聖地回復の預言は同日に成就したので、信者は再臨も起きると確信したと思われる。

『聖潔之友』にある「白衣、耶穌之再臨、リバイバル唱歌譜付二聖小傳は品切れ」¹⁰の掲示は、再臨を待望した信者が着用した白衣や使用した讚美歌の品切れを示している。このことで多くの信者が白衣を着て賛美歌を歌いながらイエスの再臨を実際に待ったことが推定できる。

この年の暮れ12月20日には新年号が発行され、新たな年に起きることが述べられている。それは、エルサレムからのイスラム教徒の掃、ユダヤ人の帰還、世界大戦の講和、南の王と北の王の対立、そして再臨である。再臨に関しては以下のように述べられている。

「聖徒の携へ挙げらるゝのは今年かもしれない。しかも其日は或人の勘定の如くであれば9月7日である。地上に残さるゝ凡ての人は益々軍備を拡張し、ハルマゲドンの戦の準備にとりかかるだろう。主はリバイバルを起して多の魂を救ひ給ふ事と信ずる。」¹¹

艱難の時代にイエスの空中再臨があり、信者は天に携え挙げられ、千年王国が訪れる。これが主の日の内容だとされた。

1918年1月1日から5日にかけて神田ホーリネス会堂において、第17回新年聖会が開催された。この聖会は「預言研究を主とした」と形容され、「主臨らん」を標榜するものであった¹²。東洋宣教会にとって1918年の重要課題が再臨であることが分かる。

予測された日に再臨は起らなかったが、多くの信者が再臨をその後も信じていた。

以上のように、再臨運動が開始される半年前において、東洋宣教会ではすでに再臨についての教えが信者に行き渡っていた。ただし、それは聖書に基づく再臨の教えというよりむしろ、再臨時期を予測したり聖書の予言を具体的国家にあてはめたりするものであった。また、聖潔の運動が盛んになることが再臨の条件だとされて、再臨が唱導され信者も積極的に参加したことがわかる。

2 開始・高揚期（1918年1月－5月）

東洋宣教会は柏木にあり、内村鑑三宅に隣接していた。さらに1916年7月17日未明に起きた柏木一体の火事の際には中田重治が聖書学院学生を引き連れて消火に努め、内村家への類焼を防いだ。これをきっかけに両者の交際が始まった¹³。

木村清松（1874－1958年）は、1894年以降の渡米時にムーディ聖書学院でも学び、1902年に帰国後、全国にわたって伝道を展開した。1908年から6年間は日本組合教会洛陽教会牧師を勤めた¹⁴。中田と木村は米国ムーディ聖書学院に留学して再臨論を学んでいた。こ

の二人に、鑑三が加わった。鑑三が56歳で年長であり、この運動の中心的役割を果たした。

ところで、鑑三が再臨運動に参加した遠因としては、キリスト教である米国が世界大戦へ参戦したことに対する失望、愛娘ルツ子の死、思想的行き詰まりの時に米国の友人ベルから送られてきた雑誌『Sunday School Times』の再臨に関する記事を読んだこと等が指摘されている¹⁵。

確かにこれらのことは鑑三自身も述べていて、十分に推定できるが、聖書研究によって再臨の教義の重要性を知るに至ったことがより直接的な要因であったと考えられる。

1月10日発行の『聖書之研究』の「新年雑記」において「問題はキリスト再臨を中心的真理として見たる聖書の研究である」¹⁶と述べ、その後の鑑三の演説内容は聖書研究に依拠するものであった。また、「余がキリストの再臨に就て信ぜざる事共」においては、再臨の年月日を計算すること、神癒、そして聖霊の臨在としてのキリストの再臨を信じないと述べている¹⁷。他の二人とは異なり、あくまでも聖書研究に基づく再臨論を鑑三は展開したことがわかる。

A 聖書の預言的研究演説会

三人が発起人となって、1月6日午後2時から東京基督教青年会館において、聖書の預言的研究演説会を開催した。講演題と講演者は以下の通りである。

1月6日「聖書の根本的真理」	中田重治
「我が父の家には御宅多し」	木村清松
「聖書の預言的研究」	内村鑑三
2月10日「馬太伝に現はれたる基督の再来」	内村鑑三
「基督の再臨につける使徒等の觀念」	オルトマンズ
「偽基督の霊と彼の出現」	中田重治
3月3日「人の子及び主としての基督」	藤井武
「世界の平和は如何にして来る乎」	内村鑑三

鑑三は必ず講演し、しかも多くの場合、最後に講演した。

1月6日も2月10日も1200人を越える参加者があり、3月3日の演説会には1300人を越える参加があった¹⁸。

再臨運動は開始時において、すでに高揚した運動として展開した。これは東洋宣教会による再臨運動が先駆的働きをしていた結果だと考えられる。

中田は再臨運動を東洋宣教会の中心的な運動とみなして信者に呼びかけた。そして自らには聖書研究に弱点があることを認め、それを補完するものとしての鑑三の再臨運動への参加を歓迎していた。それは、2年にわたる再臨運動の間、『聖潔之友』に再臨講演会の広告だけでなく、鑑三の講演内容をも掲載していたことから推定できる¹⁹。

2月20日には今井館聖書講堂において、再臨待望信

者の合同祈禱会が開催された。30人以上の参加者の所属教会には、今井館、東洋宣教会だけでなく、日本伝道隊、聖公会、メソジスト教会、福音教会、基督教会、日本組合基督教会（大阪天満教会）もあり、再臨運動は超教派の運動として展開したことが分かる。

B 地方都市への展開

聖書の預言的研究演説会は、以下のように3月以降には関西と関東の主要都市においても開催された。

- 3月10日 大阪 天満教会 参加者600人以上
「信仰の三階段」 内村鑑三
「余が基督の再臨を信ずるに至りし理由」 木村清松
「聖書の中心的真理」 中田重治
「基督再臨の欲求」 内村鑑三
- 3月13日 京都 京都基督教青年会館
参加者1200人以上
「聖書の中心的真理」 中田重治
「余が基督の再臨を信ずるに至りし理由」 木村清松
「世界の最大問題」 内村鑑三
- 3月31日 神戸 神戸基督教青年会館
参加者1200人以上
「基督の復活と再臨」 内村鑑三
- 5月26日 横浜 横浜基督教青年会館
参加者会堂一杯
「米国に於る基督再臨の信仰」 平出慶一
「日出国より登る天使」 中田重治
「世界戦争と基督教」 内村鑑三

これらの講演会においても、鑑三は最後の講演を担当して指導的立場にあったことが分かる。

また、講演者には、鑑三と中田と木村以外に、組合教会、自由メソジスト教会、聖公会、日本伝道隊等所属の牧師や信者がいて、東京における演説会と同じく、超教派の協力活動であったことも分かる。

特に神戸における演説会には、1200人が参加し100人以上の人が座れずに散会した。5月26日に神戸で開催された第2回演説会には900人以上の参加があった。

4月から5月にかけて、再び東京三崎会館（旧バプテスト中央会館）において7回にわたり聖書の預言的研究演説会が開催された。参加者は平均して600人から700人であった。これは1月から3月にかけて開催された演説会参加人数の約半分であり、急激な減少といえる。

5月24日に第一次聖書の預言的研究演説会の終了式が開催された。

C 再臨運動批判

再臨運動はこのように東京を中心として関西の主要都市にも超教派の運動として展開したが、この運動を批判する者も現れた。

3月1日にはユニテリアンの牧師内ヶ崎作三郎が、

4月1日には内務省官吏相原一郎と陸軍大学教授杉浦貞二郎と、日本組合基督教会の本郷教会牧師海老名弾正が、5月1日にはメソジスト教会牧師白石喜之助が、紙面により再臨論を批判した。批判者の多くは日本組合基督教会とユニテリアンに属していて、この段階では、神学とりわけ聖書解釈の違いが論点になっている²⁰。4、5月に聖書の預言的研究演説会の参加者が減少したのは、この批判によるものと考えられる。

D 再臨運動の組織化

再臨運動は開始された時点から高揚していた。さらにこの運動が継続したものになるように、運動を支える組織が自発的に形成された。それが、日本基督希望団と柏木兄弟団である。

日本基督希望団は、3月12日に天満教会において開催された大阪の基督再臨信者の祈禱親睦会において結成された。自由メソジスト教会の河辺貞吉、聖公会の藤本寿作、日本組合基督教会の今井安太郎らが加わった。

また、柏木兄弟団は、6月8日に結成された。これは、それまで鑑三の聖書研究会に出席していた第一高等学校、東京帝国大学の学生から成る柏会、同じく学生から成る白雨会とエマオ会等が合同された組織であり、以後、再臨運動を支援した。

3 対抗・充実期（1918年6月 11月）

この時期においては、再臨運動を批判する勢力が活動し、再臨運動に対抗する関係になり、この緊張した状況において再臨運動は進展していく。

A 再臨批判運動

6月9日午後3時より東京三崎会館で鑑三は「ラザロの復活」と題して講演した。「ラザロの復活は実に再臨の日に於ける我等の復活の模型である」²¹と結論して講演は終わった。参加者は400人程でさらに減少した。

一方、同じ日に、海老名弾正牧師の本郷教会では、基督再臨問題講演会が開催されていた。この会では、海老名から受洗した後に米国に留学した今井三郎が「現代に於ける再臨運動の批判」、杉浦貞二郎が「聖書に於ける再臨思想の意義」、そして海老名自身が「宗教思想の推移と再臨問題」と題して講演した。『東京朝日新聞』にもこの講演会の広告が掲載され、聖書の預言的研究演説会の参加者より多い約500人が参加した。

基督再臨問題講演会は、明らかに鑑三らの再臨運動を批判する目的によるものであった。実際に、再臨を批判するだけでなく、再臨運動に出席しないように信者に呼びかける等の活動も行った。

鑑三はこの動きに対して『聖書之研究』215号の「乗雲の解（聖書を戯誕る基督教の教師等に告ぐ）」で「世に見苦しき事とて基督教の教師等の聖書攻撃の如きは

ない」²²と彼らを批判している。

B 日本基督教平信徒信仰革正会

再臨運動を批判する勢力が活動する一方、翌6月10日には、日本基督教平信徒信仰革正会が設立された。

これは、再臨運動を推進する会である。

大阪天満教会の信者青木庄蔵は、社会事業家であり大阪市議員も勤めた。彼が発起人となって結成されたこの革正会は、「再臨を以て聖書の中心的真理なりと信じ其研究宣伝を期す」ことを設立趣意の一つに掲げた。これは、再臨運動を信者として支援し、聖書にしたがって教会そのものを改革していこうとする団体である。この趣意に関して鑑三は「今や同志の間に此信仰の上に立つ斯かる団体の成立するを見て余輩は心躍らざるを得ない」²³と喜んでい

再臨運動を支援する団体としては、日本基督希望団と柏木兄弟団と日本基督教平信徒信仰革正会が信者の間で設立され、他方、再臨運動を批判する目的の基督再臨問題講演会が設立された。両者のこの緊張関係の中において再臨運動は展開していく。

C 地方都市への展開

この時期には以下のように地方都市にも展開するが、参加者は500人以下であった。

6月30日	札幌	札幌独立基督教会	参加者400人以上
7月1日	札幌	札幌独立基督教会	参加者350人
7月2日	札幌	札幌独立基督教会	参加者400人以上
8月24日	軽井沢	宣教師のための講演	参加者400人
10月11日	岡山	第一回聖書講演会 岡山県会議事堂	参加者500人
10月12日	岡山	第二回聖書講演会 岡山県会議事堂	参加者500人
10月13日	岡山	第三回聖書講演会 岡山県会議事堂	参加者400人

札幌の講演者は鑑三だけだが、岡山では中田も講演者であった。だが、木村は再臨運動に批判的な日本組合基督教会に所属していたためか、9月21日に運動から離脱した²⁴。

D 「新規播直し」

11月8日から三日にわたって基督再臨研究東京大会が東京基督教青年会館で開催された。

この大会の発起人は鑑三と中田以外に、聖公会のバンカム、バプテスト教会の坂田祐とクラゲット、基督友会の沢野鉄郎、明治学院のオルトマンズ、東洋宣教会の平出慶一であり、革正会員の青木庄蔵と松岡帰之も講演と証詞を担当した。日本組合基督教会とメソジスト教会を除く多くの教会が協力して大会を支えたことがわかる。鑑三は、「聖書と基督の再臨」「地理学的

中心としてのエルサレム」「基督再臨と伝道」と題して講演した。

参加者は、8日の午後が500人、夜が600人。10日が800人であった。

鑑三は8日の日記の中で『『新規播直し』の責任を感じた』²⁵と記している。また、翌日に開かれた有志晩餐会においても、「我等は今後の標語として『新規播直し』を採用した」²⁶と日記に述べている。このことから、再臨運動の沈静化に抵抗しようとする鑑三等の差し迫った状況が推定される。

聖書の預言的研究演説会を開始した1月には、同じ東京基督教青年会館で約2倍の1200人を越す聴衆がいた。今は参加者がその半分になってしまった。そのことが、「新規播直し」の必要を迫ったと考えられる。

4 対抗・沈静期（1918年11月 1919年5月）

11月11日に第一次世界大戦が終結した。これを契機として再臨運動は対抗・沈静期を迎える。運動としては、再臨批判者の妨害が進む中、参加者が再び増加した。しかし、説教の主題が再臨からしだいに他へと移行した。この時期は講演会場をめぐる騒擾で終わる。

A 大阪大会の成果

11月から12月にかけて日曜日午後2時から東京基督教青年会館において開催された講演会への参加人数は、400人から500人で横ばい状況であった。12月22日が1918年最後の講演となったが参加者は400人余と低調だった。鑑三は日記においてこの一年を振り返り、「北は北海道より南は岡山まで高壇に立つ事58回2万余人に福音を説いた、其点に於て今年余に取りレコード破りである、ねがふ来年は更に之れ以上たらん事を」²⁷と述べている。

基督教再臨研究大阪大会は1月17日から三日間、中之島公会堂において開催された。

第一日目の昼の会における証詞者は平出慶一、藤井武等4人、講演者は中田重治で参加者は1000人余もあった。夜の会では証詞と宣教師コルテスの講演の後に「万民に関はる大なる福音」と題して鑑三が講演した。以下のように日記に記されている。

「此夜来り会する者千六七百人、其半数以上は確に未信者であった、然れども彼等は水を打ちたるが如き静肅を以て余の言はんと欲せし所に耳を傾けて呉れた、大なる感謝である、我等は第一日に勝利を博してハレルヤの声を揚げた。」²⁸

参加者は増大した。第二日目の昼の会は1000人、夜の会は1800人の参加があり、最終日には、再臨運動中最多参加者数である2300人を記録した。これは、3500人に招待状を送り、新聞広告や交差点でのポスター等の手段が功を奏したとも考えられる。鑑三はこの日「恩恵溢るゝ会合であった」²⁹と記した。

このように、大阪に於ける再臨運動は大成功に終

わったが、東京では事情が異なっていた。2月と3月に東京基督教青年会館において開催された講演会の出席者は600人以下でそれほど増加していない。

B 再臨反対者の活動

大阪とは異なり、東京では再臨反対者が活動していた。

再臨運動に反対する者が増加したことを、1月30日に中田は『聖潔之友』で述べている。それによると公然と再臨を標榜しているのは、「プレマス派と東洋宣教会と無教会派」だけである³⁰。この時期には再臨に批判的な教会が東京において大勢を占めていたことが推定できる。

1月31日には、1907年以来自宅で独立教会駒込基督教教会を組織していた牧師富永徳磨が「基督教再臨説と基督教」を『神学評論』で発表して再臨運動を批判した。4月1日には井上右近が「内村氏の基督再臨論批判」を『無尽灯』に発表した³¹。英字新聞 Japan Chronical も、3月9日に再臨反対の論文を掲げた。³²いずれも聖書解釈の違いによる神学上の批判である。

再臨に反対した者は、神学上の理由からだけではなかった。

3月31日に東京基督教青年会館において東京市内牧師の会合が開催され百余名の牧師が集まった。席上、鑑三の日曜講演会が話題になり、日本組合基督教会牧師小崎弘道とメソジスト教会監督平岩愷保が反対意見を表明した。両者の意見は以下の通りである。

「内村氏は無教会主義者なり、現に組合教会中には氏に講演を依頼せし為教会の瓦壊を来したる事実あり。教会の同情を得んとする青年会が宗教部の事業を氏に托すは矛盾に非ずや。又教会にとりては大問題なり。」(小崎)

「多数の聴衆を集めたりしも、教会の反対を喚起し実に青年会の危機を醸したり、而して某氏の講演の結びし果は教会は勿論少年に取りても不利益なりき。今日も又然り。青年会が教会の同情を失ふは由々しき大事なり。故に何とか之を処理せられんことを望む。」(平岩)³³

「教会を否定する」無教会主義者の講演により青年が惑わされ市内の教会の存在が危うくなるという理由で、同会館の使用を禁じるという意見である。

4月10日夕刊『時事新報』がこの紛擾を取り上げたので、鑑三は以下の意見を時事新報社に送った。

「私は教会を認めます、然し乍ら腐敗せる、俗化せる、聖書が明白に教ふる教理に反対する我国今日の多数の教会を認むることは出来ません...私は去れと云ふならば何時なりとも青年会の高壇を去ります。然し乍ら私に去れと云ふものは神が私を以て為し給ひし丈け、又其以上を私に代って為す責任があります。今や数百の飢渴きたる靈魂は真理を求めて日曜日毎につどいひ

来りつゝあります。私の排斥者は彼等を満足せしむる自覚があります乎。」³⁴

その後も『時事新報』は4月14日に、また『万朝報』は4月16日の夕刊に、さらに『国民新聞』は4月18日に、この問題を取り上げた。これらは、いずれも鑑三に同情する内容である。

このような再臨運動に対する批判にもかかわらず、同会館における鑑三の講演会は4月から5月にかけて平常通り開催され、参加者は平均800人近くに増加したことが分かる。

5月10日に発行された『聖書之研究』において鑑三は「腐敗せる教会の特徴は預言研究を嫌ふにある」³⁵と述べて、再臨に反対する教会を批判した。

5月13日午後7時に青年会館において基督教革正会大演説会が開催された。会場には1800人を越える参加者があり、青木庄蔵、土岐孝太郎と中田重治の講演の後に鑑三は「基督教会革正の必要」と題して講演した。教会の腐敗には、第一に『六合雑誌』³⁶やユニテリアンの異端があり「実に彼等にとって教会は信仰よりも大切なものである」³⁷と断じた。第二は俗化であり「利益を獲ん為に此世と妥協する」³⁸と具体例を挙げて批判した。

この演説内容が基督教青年会理事に伝わり、批判された教会の牧師である理事の態度を硬化させた。

C 青年会館事件

5月26日、東京基督教青年会理事会が開かれ、青年会館における鑑三等の講演会謝絶が決定された。翌日朝、同青年会主事荒川哲次郎が鑑三宅を訪れて決定を伝えた。28日には同青年会理事を辞任した長尾半平と鑑三は青年会館を訪れて、決定理由を聞こうとしたが明確な答えは得られなかった。だが一方的に会館は閉鎖され「本会日曜講演の儀五月限り夏期中休講致候条承知被下度候」の通達が鑑三に送られた³⁹。以上が青年会館事件の概要である。

5月30日の『東京朝日新聞』はこの青年館問題と塚本虎二の辞職を取り上げた。翌日の『万朝報』も「基督教界の暗流 教会主義と無教会主義」と題してこの問題を掲載した。いずれも鑑三の立場を擁護する内容になっている⁴⁰。

5月30日の日記は「余は再び自由の人になった、暗かりき基督教界との関係が絶えて余は明るき身と成った.....あゝ愉快、あゝ感謝、『全集』は売れる、新高壇は与へられる、夜が明けた、狐や狸と縁を絶ちて雲雀と共に囀る時が来た、あゝ愉快!!!」⁴¹と記されている。

6月1日には、新たな会場として丸の内にある大日本私立衛生会講堂において講演会が開催された。参加者は700人で入場謝絶の盛況であった。

青年会館事件は鑑三ら無教会だけでなく東洋宣教会に対するものでもあった。

『聖潔之友』の社説で中田は「青年会館借用拒絶事件」と題して鑑三の立場を擁護して「反対するなら何故堂々と反対しないのか。集会所を貸さないとかいふ詰まらない手段を以って我等の運動を邪魔するより外に取る術がないのであるか⁴²と論じている。さらに、6月26日発行の『聖潔之友』は「悪魔退治号」になっており、「余の見たる内村氏の無教会主義」と題して無教会主義を問題のないものとして説明して「予は諸兄弟に乞ふところは同氏と予との間柄は益々円満であり、純福音の宣伝の為に益々親密になるよう祈る事を切に求むるものである⁴³と論じ、再臨反対者を終末に現れる悪魔だと暗示した。

中田は再臨運動の最初から最後まで鑑三を擁護し協力し続けたことが分かる。

D 講演題の変化

1917年1月に聖書の預言的研究演説会が開始されて以来、鑑三は一貫して再臨を講演題にしてきたが、この時期になると、それが幾分変化している。

クリスマス説教を除いて再臨を扱わない講演を列挙すると以下ようになる。

1918年11月17日	「腓利門書の研究」	東京基督教青年会館
11月24日	「腓利門書の研究」	東京基督教青年会館
12月15日	「イエスの母マリヤ」	東京基督教青年会館
1919年1月1日	「創世記1章1節」	東京基督教青年会館
2月9日	「ユダの理想婦人」	東京基督教青年会館
2月16日	「イエスの終末観」	東京基督教青年会館
2月23日	「イエスの終末観」	東京基督教青年会館
2月30日	「イエスの終末観」	東京基督教青年会館
3月16日	「死後の生命」	東京基督教青年会館
5月4日	「神の愛」	東京基督教青年会館
5月11日	「人類の墮落」	東京基督教青年会館

また、4月10日に発行された『聖書之研究』225号の「余の宗教」では再臨の言及が見られず、「完全きたる」では再臨の言及がかなり弱まっている。4月20日の講演「パウロの復活論」では、「再臨あり復活ありて始めて個人の永遠の生命あり⁴⁴と再臨を復活と同等に扱っている。

再臨批判が高まったから再臨を論じなくなったのではなくて、この時期に鑑三の関心がすでに再臨から他

へと移りつつあったとすることができる。

5 衰退・転換期（1919年6月—）

大日本私立衛生会講堂に移動した6月1日の講演「信仰の三角形」では、「神の義」「神の愛」「イエスキリストは神の子」が重要だとされて、再臨は除外されている⁴⁵。以後も再臨が講演されることはほとんどなかった⁴⁶。

7月と8月は講演は休講することになった。9月21日に講演会は再開されたが講演題は「モーセの十誡・総論」であり、11月23日までモーセの十誡が論じられた。その後12月までの講演題は「律法と福音の関係」「罪の赦し」「完全なる救拯」であった。それ以後再臨はほとんど論じられなくなったが⁴⁷、それにもかかわらず、参加者は600人弱の盛況であった。

この時期において明らかに再臨運動は衰退した。そして鑑三の講演題は終末論から復活論、律法論、救済論等へと転換していった。

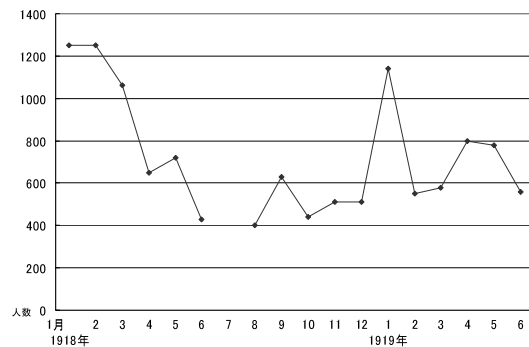
6 結論

再臨運動参加者を月別に見ると、再臨運動の趨勢が理解出来る。（表参照）開始された時点で最も高揚したが急激に沈静する。だが徐々に進展してふたたび衰退する趨勢になっている⁴⁸。この趨勢の背景と運動の性格について、以下の3点を結論として指摘する。

A 説教運動

第一に、再臨運動は説教運動であった。すなわち、「語る者」が講演し「聴く者」がそれを聴くという説

表 再臨運動参加者数
(月別平均)



教を中心とした運動であり、それ以上のものではなかった。日本基督希望団、柏木兄弟団や日本基督平信徒信仰革新会が自発的に組織されたが、これらは講演会を支援するためのものであって宣伝活動が中心であった。従って、「語る者」が再臨を語らなくなったら、その段階で再臨運動は終わらざるをえない。また、「聴く者」の大半は教会に属する信者であった。従って、属する教会の牧師が再臨運動を批判して参加を禁ずれば、それに従わざるをえない。他方、大阪においては再臨批判が東京ほど定着していなかったので、

1918年1月にでも再臨運動に大きな成果があったと考えられる。

B 前千年王国論

第二に、時代状況を考慮しなければならない。

1914年6月に始まった第一次世界大戦は予想を遙かにこえて拡大した。この犠牲者900万人以上を出した悲惨な戦争が、再臨運動の時代背景にあった。日本国内では、1917年から戦争インフレのために米価が異常に高騰し、8月3日には富山に米騒動が起きるといふ経済的危機状況にあった。一般的に歴史上、危機的状況に陥った時、キリスト教文化圏において「艱難時に再臨があって千年王国が出現する」という前千年王国論が生起する傾向にある。この終末論は、日本においてだけでなく米国においても進展した。戦争が継続する間は、確かに再臨運動は高揚した。しかし、1917年4月に米国が参戦して1918年秋に休戦になり、平和が現実になろうとした時点で、すでに再臨運動は沈静化し始めた。平和になると前千年王国論に基づく再臨論は成立しえなくなるのである⁴⁹。

C 聖書に「聴く者」

第三に、「語る者」が再臨を語らなくなっても講演に出席し続けた500人の「聴く者」に注目したい。

確かに再臨運動は諸教会が協力して開催する段階から、協力する教会が減少して排他的段階になり、ゾンターク・ミラが指摘したように鑑三の「名をなしキャンペーン」⁵⁰になった。だから「語る者」のカリスマ性に魅了されていた「聴く者」も多くいたと考えられる。だが同時に、再臨待望という宗教感情に耽溺せず、再臨批判にも動揺せず、講演題が再臨から律法、罪、救いに変わっても、真摯に聖書を学ぼうとしていた者もいた。彼らは無教会の集会で、あるいはそれぞれ属する教会で、聖書に「聴く者」の範となったと考えられる。再臨運動により教会は分裂した。だが、人ではなく、聖書に「聴く者」が起こされたこと。それが再臨運動の積極的な果実だということができる。

今後の研究課題として、まず、再臨運動を思想の観点から分析しなければならない。鑑三、中田、批判者たち、そして信者はどのような再臨論を持っていたのであろうか。そして再臨運動の中で論じられたユダヤ人問題を検討しなければならない。

注

1 思想的観点から分析したものとしては以下がある。岩谷元輝『内村鑑三の再臨思想：その紹介と批判』（泉屋書店、1990年）；宮田光男編『内村鑑三の復活再臨信仰』（ロゴス社、1999年）；岩野祐介「内村鑑三の『近代批判』と再臨運動 社会から個人へ、そして再び社会へ」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）24号（2004年）；李慶愛「内村鑑三における宇宙神論の展開」『比較社会文化：九州大学大学院比較社会文化研究科紀要』9号（2003年）；近藤勝彦「内村鑑三にお

る再臨運動とデモクラシー批判の問題」『聖学院大学総合研究所紀要』15号（1999年）；渋谷浩「内村鑑三の政治思想（上） 社会進化論より再臨信仰へ」『明治学院論叢研究年報 法学』1号（1967年4月）。社会学的観点から分析したものとしては、ゾンターク・ミラ「内村鑑三と大正期の再臨運動」『キリスト教学』（立教大学キリスト教学会）第43号（2001年12月）がある。同氏は、キッペンベルクの宗教学的アプローチに基づいて、救済論の立場から再臨運動を分析して、再臨運動を1918年3月1日と8月3日を転換点にして3時期に区分している。3月1日は再臨への批判が表明された日だが、その後も何度も批判は表明されているので転換点にはなりえないと考えられる。8月3日は「中田と別れる」日だが、中田重治は10月11日からの三日にわたる岡山聖書講演会、さらには11月8日からの三日にわたる基督再臨研究大会にも鑑三とともに講演して、鑑三と再臨運動を支援し続けたので、転換点にはなりえないと考えられる。

2 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）560頁の「再臨待望運動」の項を参照。

3 同、990頁。

4 『聖潔之友』552号。

5 同、571号社説。

6 再臨の年月日に関しては、旧約聖書各書の預言を基にして計算している。また、再臨のしるしとしては以下の5点を指摘している。1 ユダヤ人のパレスチナ帰還、2 宣教運動の広がり、3 全世界にわたる聖潔の運動、4 交通と知識の向上、5 世の腐敗、人情の墮落、戦争、教会の墮落等。同、570号参照。

7 なお9月17日には、借金を全て返済した者、夜の12時まで家族で祈っていた者、友人と祈っていた者が信徒の中にいたと記されている。同、575号社説。

8 同、582号社説。

9 同、584号社説。

10 同。

11 『聖潔之友』585号社説。

12 同、8頁。

13 鈴木範久『内村鑑三日録10』（教文館、1997年）9-10頁。

14 『日本キリスト教歴史大事典』369頁。

15 小原信『内村鑑三の生涯』（PHP文庫、1997年）414頁。

16 『聖書之研究』210号、『内村鑑三全集24』（岩波書店、1982年）42頁。

17 同、47-49頁。

18 演説会への参加者の数等に関しては、『聖潔之友』、『聖書之研究』、鑑三の日記等から分析した。鑑三は1918年8月26日以降日記を克明に記しており、特に集会の参加者数も記録している。以下を参照。『全集 33 日記1』（岩波書店、1983年）

19 『聖潔之友』の以下の号に鑑三の講演内容等が紹介されている。590号；597号；601号；605号；608号；610号；619号。608号と610号には、鑑三の長男である内村祐之の一流野球部の投手としての活躍と安息日と禁酒を厳守することが鑑三と

- の関係で説明されている。長男の野球での活躍は鑑三にとって大きな励みであった。
- 20 以下がこの時期における再臨を批判する文書である。内ヶ崎作三郎「基督再臨説批判」『六合雑誌』446号(1918年3月1日)、「基督再来の高唱」『新人』212号(同日)；相原一郎「基督再臨説の起源」『六合雑誌』447号(1918年4月1日)；杉浦貞二郎「基督再臨説の根拠について」『神学之研究』第9巻第3号(同日)；海老名弾正「基督再臨説」『新人』213号(同日)；「内村氏一派の再臨運動」『基督教世界』1802号(1918年4月25日)；「基督再臨論の迷妄」『新人』214号(1918年5月1日)；白石喜之助「現代基督教界の迷妄」『六合雑誌』448号。
- 21 『全集 24』, 259頁。
- 22 同, 198頁。
- 23 同, 226頁。平信徒信仰革正会の他の趣意は以下の二点である。「我等は我国現時の宗教界信仰革正の必要を認め其実行を期す」；「我等は信仰の事に関し平信徒の責任を自覚し協力一致して之を全ふせんことを期す」。
- 24 再臨運動の不参加を伝える木村清松の手紙を受けた日の日記に、鑑三は以下のように記している。「去ると言ふならば止むを得ない、しかし乍ら余の甚だ解し得ない事は『再臨は木村清松の説く教の心髄骨子に候』と明白に言ふ木村君が基督再臨の教は亡国的なり非聖書的なり非基督的なりと言ひて誹謗する組合の先輩方と運動を共にせらるゝ事である」『全集 33』12頁。
- 25 同, 30頁。
- 26 同, 32頁。
- 27 同, 48頁。
- 28 同, 59-60頁。
- 29 同, 61頁。
- 30 『聖潔之友』643号社説。教派としては組合派、メソジスト、聖公会、バプテスタが再臨に反対していると論じられている。
- 31 富永論文は『神学評論』6-1に、井上論文は『無尽灯』24-4に発表された。
- 32 「斯くてオルソドックス、ユニテリアン、純理主義者、悉く余の反対者である、彼等宗教の事に関しては相互に大に説の異にするも再臨に反対するの一事に於て其歩調を共にする」と日記に記されている。『全集 33』87ページ。
- 33 『福音新報』(1919年4月10日)
- 34 『全集 24』586-587頁。
- 35 同, 556頁。
- 36 小崎弘道が創設した東京基督教青年会の雑誌。
- 37 『全集 25』39頁。鑑三は1918年8月10日発行『聖書之研究』217号においても再臨を信じない者としてユニテリアン、組合教会、アルメニヤン主義のメソジストを挙げて「信仰よりも行いに重きを置く」と論じた。同, 313頁。1919年4月10日発行の225号においても「基督再臨を迷妄視する教会の状態を見るに其神学校は少しも振るはず其生徒の数は教師の数よりも甚少く、其伝道心たるや甚だ微弱にして神学者にして伝道に従事せずして実業界に入る者も少なくない」と暗に組合教会等を批判した。『全集 24』541頁。
- 38 同, 40頁。具体的には大隈重信や渋沢栄一に寄金を求める行為をさした。
- 39 『教友』15号(1919年)
- 40 鈴木範久『内村鑑三日録10』195-204頁。
- 41 『全集 33』115頁。鑑三は東京基督教青年会に伝道費として寄付金を贈り、6月12日にその感謝状を受けた時「斯くして此不愉快なりし青年会事件も表面なりとも礼儀を以て終るを得て感謝に堪へない、是で此事は万事忘れるであろう」と日記に記している。同, 120頁。
- 42 『聖潔之友』662号(1919年6月12日)
- 43 同, 664号社説。666号(7月10日)も悪魔退治号となっていて社説では「教会内の悪魔」として「彼(悪魔)は異端と俗化のパン種を教会の中に入れて教会を攪乱する者である」と述べられている。
- 44 『全集 24』581頁。
- 45 『全集 25』84-85頁。
- 46 鑑三は、6月8日の講演「希望と聖徳」では「基督者の聖徳はキリスト再臨の希望より来るとは聖書全体が強烈に主張する所の深き真理である」と論じた。同, 6頁。
- 47 鑑三は、10月23日の午後、千葉町同盟基督教教会会堂で「世界の現状と基督の再臨」の題で講演している。
- 48 1917年7月の記録はなく、1918年1月は大坂大会における出席者数である。
- 49 他方、平和で繁栄している時代には、「この世は漸進的に千年王国に移り、その後キリストが再臨する」という楽観的な後千年王国論が進展する傾向にある。
- 50 ゾンターク・ミラ、前掲論文、44頁。宗教運動を発生論的に類型化すると、「生成 発展 対抗 迫害 円熟 衰退」の順になる。再臨運動は、「生成 発展 対抗 衰退」の経路をたどったとすることができる。拙稿「宗教運動の類型化1」『愛知教育大学研究報告』第47号(1998年)を参照。

(平成19年9月18日受理)